

社会イノベーション研究
第13巻第1号(19-36)
2018年3月

2017年11月2日掲載承認

日本語の動詞と語彙アスペクト

—岡山県津山方言の「しよる」「しとる」の用法調査中間報告—

磯 野 達 也

1 はじめに

標準語の「～している」は、行為や動作に焦点をあてる進行形の用法（本稿では、「過程」と呼ぶ）と状態やある行為・動作の結果生じる結果状態に焦点をあてる基本的な用法がある。

- (1) a. 田中さんが歌っている。 (過程)
- b. 斎藤さんはその場所を知っている。 (結果状態, 状態)

それに対して、既に多くの研究にあるように、西日本で広く用いられている「～しよる」「～しとる」は、「～しよる」が行為や動作に焦点を当てる進行形的な用法を、「～しとる」が状態や結果状態に焦点を当てる用法を基本的な用法としてもち、「～している」がもつ2つの用法の1つずつを担っている。

- (2) a. 田中さんが歌いよる。 (過程)
- b. 斎藤さんはその場所を知っとる。 (状態)

「しよる」「しとる」の用法は地域によって微妙に差があることが知られている。筆者が行っている研究は、動詞の語彙アスペクト、文が表すアスペクトと

意味、動詞の意味の関係を詳細に調べることを目的としているが、その一環として、日本語の西日本方言、特に岡山県の北部にある津山市周辺で用いられる「しよる」「しとる」の用法を調べている。この地域でのこれらの表現の機能の分析を行うことが本研究の日本語分析の目的の1つであるが、本稿ではこれまで行った調査に関する中間報告を行い、これまで確認できた事実から、それぞれの表現の用法について考察を行う。そして、今後の調査と分析についての課題と方向性について最後に触れる¹⁾。

2 標準語の「している」の用法について

工藤 (1995) をはじめとする一連の研究では、動詞を主体継続動詞、主体変化動詞、主体継続客体変化動詞を中心として分類し、「しよる／しとる」の用法を調査し分析を行っている。本稿でも、それらの研究との比較が必要になった場合を考慮して、同様の分類に基づいて記述と報告を行う²⁾。

標準語の「している」は最初に示した基本用法に加えて、次のような用法も併せ持っている。

(3) 痕跡（偶然的な結果）

- a. あ、ネコが僕のケーキ食べている。(ケーキの残骸を見て)
- b. あ、この先の角に新しい家を建てている。(新しく建った家を見て)

(4) 経験記録（以前の動作や変化の結果が残っている）

- a. もう朝ご飯は食べている。(「朝食食べる?」という問いへの答えとして)
- b. もうその本、読んでいる。

(5) 反復習慣

- a. 毎日、3キロ走っている。
- b. 毎日のようにカップを割っている。

これらの「している」の用法は共起している動詞の意味と深く関わりがある。

1) 本研究の一部は、JSPS 科研費 JP26370572, JP16K02934, 及び、成城大学特別研究助成の助成を受けている。

2) 途中で語彙アスペクトや瞬時性といった概念も必要に応じて含めて議論を行う。

それらの動詞のタイプは主に次のように分類される。

(6)

- a. 主体変化動詞（限界動詞）：死ぬ，消える，わかる，落ちる，離陸する，寝転ぶ，出る
- b. 主体動作客体変化動詞（限界動詞）：乾かす，作る，切る，落とす，はずす，動かす
- c. 主体動作動詞（非限界動詞）：食べる，飛ぶ，待つ，泣く，歩く，遊ぶ，すすむ，のぞく，蹴る，うなずく，にやける
- d. 心理動詞：思う，怒る，困る
- e. 可能・超過動詞：読める，作れる，言える，見える，甘すぎる
- f. 存在動詞：おる（いる），ある

上記の動詞タイプでは，変化動詞には状態変化のほかに位置変化を表す動詞も便宜上含めてある。また，主体動作動詞は非限界動詞が多いが，量を限定するような目的語をとると限界的になる。

- (7) a. ごはんをたくさん食べる。（非限界的）
- b. お寿司を一貫食べる。（限界的）

これらの動詞のタイプと「している」の用法の関係は次のようになる。

(8)

- a. 主体変化動詞（限界動詞）：結果状態
電気が消えている。
鉛筆が落ちている。
- b. 主体動作客体変化動詞（限界動詞）：過程
服を乾かしている。
夕飯を作っている。
- c. 主体動作動詞（非限界動詞）：過程
ラーメンを食べている。
子供が泣いている。

d. 心理動詞：(結果) 状態

哲也はそのことを怒っている。

解決できない問題に困っている。

可能動詞は、「過程」「(結果) 状態」いずれの用法にもほぼ用いることができるようだが、「存在動詞」は「している」と一緒に用いることはできない。また、すべての動詞タイプが「痕跡」「経験記録」「反復習慣」で用いることができる。

(8) からは、変化とその結果として生じる状態、そして動作が「過程」「結果状態」の用法と密接な関わりがあることがわかる。

3 「しよる」「しとる」の用法について

工藤 (1995) の宇和島方言を対象とした研究をはじめとする西日本方言の研究で、大まかに次のような用法が報告・分析されている。

(9) a. 過程 (動作継続過程, 変化継続過程)

妹がケーキ作りよる／作とる。

b. 直前 (動作開始直前, 変化開始直前)

机から財布が落ちよる。(財布が落ちそうなのを見て)

c. 結果 (主体の必然的結果, 客体の必然的結果)

妹がケーキ作とる。(テーブルの上のケーキを見て)

財布が落ちとる。(財布が床の上に落ちているのを見て)

d. 痕跡 (偶然的結果)

おじいちゃんがお酒飲んどる。(酔っ払ったおじいさんを見て)

子どもたちが田んぼを歩いとる。(田んぼの足跡を見て)

e. 経験記録 (以前の動作の効力)

あんたはさっきジュース飲んどる。もうやめなさい。

あの人、小さいときにアメリカ行とる。

f. 反復 (反復習慣)

お父さんは毎日お酒飲みよる／飲んどる。

あんたは小さいときよくおもちゃ壊しよった／壊しとった。

これらの事例から、「しよる」は動作や変化の継続を表すのが基本で、動作や変化の開始限界の前も表すと分析される。また、「継続」を表すことから派生して、反復習慣も表すと説明される。「しとる」は結果状態を表すのが基本であり、これは動作や変化の終了限界後の状態を表すということである。限界後を表すということから、動作や変化の開始限界後も表すことになったということで「継続」を表すと分析される。また、状態を表すことから、反復習慣も表すと説明される。

工藤の一連の研究では、「しよる／しとる」の用法はより詳細に分類され分析されているが、紙幅の都合もあり、ここでは立ち入らない。また、工藤の研究に端を発して熊本や福岡など様々な場所で調査・研究が行われている。こうした研究を通して、「しよる／しとる」の用法は、地域ごとに微妙な差が見られるとともに、使用者の年齢によっても違いが見られることが報告されている。

本稿では、岡山県津山市周辺で用いられる「しよる／しとる」の用法を調査し、これまで報告されている、特に宇和島方言での用法と違いがあるか、あるとすればどのような違いがあるかを調査する。また、その調査の結果から「しよる／しとる」の意味表示について検討するとともに、動詞の意味や語彙アспектについて検討を行う。

4 岡山県津山市付近の方言

岡山県津山市は岡山県の北部に位置する岡山県では第3の規模の都市である。岡山県最大の都市である岡山市からは、およそ60キロあり、車や列車で1時間半ほどの距離である。そうした物理的な距離や歴史的な政治上の流れもあって、岡山市で用いられるいわゆる岡山弁と津山市付近で用いられる津山弁には、類似する点が多いものの、語彙には若干の違いが見られる。「しよる／しとる」の用法にも違いがあると言われている。

これまで予備調査も含めて2回の文書による調査を行った。ここでは、その概要を報告する。

4-1 主体動作動詞（非限界動詞）

主体動作動詞の場合、津山方言でも「しよる」と「しとる」が用いられ、「過程（動作継続過程、変化継続過程）」の意味を表す。

- (10) a. 子どもがうなずきよる。
b. 子どもがうなずいとる。
- (11) a. 飛行機が飛びよる。
b. 飛行機が飛んどる。
- (12) a. 友達を待ちよる。
b. 友達を待つとる。
- (13) a. 岡山でくらしよる。
b. 岡山でくらしとる。

上で「しよる」は過程を意味することを基本とし、「しとる」は結果状態を意味することを基本とすると述べたが、両者は継続動詞と用いられると、ともに「過程」を表し、現在では表される意味に違いが感じられなくなっていると言われている。島本 (2008) では、過程を表す「しよる」と「しとる」の違いについて次のような報告をしている。

- (14) a. しよる
丁寧を感じる（語調が柔らかいと感じる）
現在進行という感じを強く受ける
観察した事柄を話しているような感じ
- b. しとる
語調が強く感じる
親しい友達に使う
事実のみを表すときに使う
目の前の一瞬の状況を描写する

しかし、筆者が調査を依頼したインフォーマントからは、「しよる」の場合は、やや時間的な幅があるように感じる、というコメントはあったものの、上にあるような違いは感じらないとのことであった。

「しとる」が本来、「結果状態」を表すことから、過程を表す際の「しとる」はある程度の行為や変化が起こった後というニュアンスがある、とされる場合もあるが、上記の「目の前の一瞬の状況を描写する」はそれとは反対の印象であり、地域によりニュアンスが異なるということの一例と考えられる。

工藤 (1995: 294) では、次のような例が挙げられている。

- (15) a. まだ、泣きよったぜ。かわいそうに。　　〈進行性＝継続性〉
b. とうとう、泣いとったぜ。　　〈開始後の状態〉

ここでは、「しよる」は動作が進行していることに焦点が置かれているのに対して、「しとる」は開始限界後に動作が進行している状態に焦点が置かれていると説明されている。しかし、筆者のインフォーマントによれば、上の例では「しよる」と「しとる」の入れ替えが次のように可能で、下の例は解釈が困難で容認できないという判断だった。少なくとも津山方言では、工藤で述べられているような両者の違いは意識されていないといえる。

- (15') a. まだ、泣きよった／泣いとったぜ。かわいそうに。
b. *とうとう、泣いとったぜ。

4-2 主体動作主体変化動詞（限界動詞）

次のように「しよる」は動作や変化の進行（つまり、過程）を、「しとる」は動作が行われた後の結果状態を表す。

- (16) a. 出口から出よる。（出ているところ）
b. 出口から出とる。（出た後で、外にいる）
(17) a. ベッドに寝転びよる。
b. ベッドに寝転んどる。
(18) a. 部屋の電気が消えよる。（ちかちかとして今にも消えそうなところ）
b. 部屋の電気が消えとる。（消えて暗くなっている）
(19) a. 飛行機が離陸しよる。
b. 飛行機が離陸しとる。

「しよる」が過程を、「しとる」が結果状態を表すという点は一般的な西日本方言の用法と同じである。

ただし、上記の用法に加えて、「出口から出とる」は、出ている最中という動作の進行も表すとのことであり、同様のことは次に見る主体動作客体変化動

詞の「しとる」形でも見られる。主体変化動詞の「しとる」形について、2つの意味で曖昧性があることはこれまであまり明確には報告されていない。

4-3 主体動作客体変化動詞

ここでも「しよる」は動作や変化の過程を、「しとる」は動作が行われた後の結果状態を表す。

- (20) a. 服を乾かしよる。
b. 服を乾かしとる。
- (21) a. シートベルトをはずしよる。
b. シートベルトをはずしとる。
- (22) a. 自転車を貸しよる。
b. 自転車を貸しとる。

「シートベルトをはずしよる」では、ベルトをはずす動作を表し、「はずしとる」ではベルトをはずし終わった後のはずされた状態を表す。「自転車を貸しよる」は今ちょうど貸している行為を行っており、「自転車を貸しとる」は既に自転車を誰かに貸していてその人が自転車を使っているということを表す。これらは、一般的な西日本方言の用法と同じである。

これらの用法に加えて、上で見た主体動作主体変化動詞と同じように、「しとる」は動作の進行も表し、「シートベルトをはずしとる」ではベルトをはずす動作の進行を表すことができ、「自転車を貸しとる」は「貸しよる」と同じように今ちょうど貸しているという行為を行っていることも表すことができる。このように、「しとる」はこのタイプの動詞と組み合わせて用いられると、意味的に曖昧となる。

4-4 心理動詞

心理動詞の場合、「しよる」はほぼ容認されず、「しとる」はあきらめている状態や困っている状態が継続していることを表す。

- (23) a. *わたし、あきらめよる。
b. わたし、あきらめとる。

- (24) a. *わたし，困りよる。
b. わたし，困っとる。
(25) a. ?突然の知らせに，びっくりしよる。
b. 突然の知らせに，びっくりしとる。

上記の動詞は，主体の心理の瞬時的な変化とその後の結果状態を表し，一種の主体変化動詞であると考えられる。

主語が3人称に変わると容認性は上がり，「しよる」「しとる」ともに容認される。

- (26) a. 友達があきらめよる。
b. 友達があきらめとる。
(27) a. 友達が困りよる。
b. 友達が困っとる。

これは，主語が変わることで客観性が増し判断がしやすくなるためであると考えられる。この場合も，動詞は主体変化動詞として認識され，例えば「あきらめよる」はあきらめた状態への変化が起こりつつあること，「あきらめとる」はあきらめた状態が続いていることを表しているようである。

4-5 可能動詞

可能動詞については，次のような結果であった。

- (28) a. ?山の頂上が見えよる。
b. 山の頂上が見えとる。
(29) a. ケーキが作れよる。
b. ケーキが作れとる。
(30) a. 早口言葉が言えよる。
b. 早口言葉が言えとる。

1名が(28a)は徐々に山の頂上が見えるようになっているときに何とか言える，というコメントであったが，それ以外については全員が可能との判断だった。

た。それぞれの (b) はいずれも見えている状態やケーキができあがっている状態を見て、それを表していると考えられる。(a) の文がどのような状況を表しているのか再度確認が必要だが、ケーキを作っているところや早口言葉を言っているところを見て、それを表していると考えられ、つまり、「過程」の用法だと考えられる。

4-6 各用法について

ここでは、3節で見た西日本方言一般に見られるとされる6つの用法について、津山方言でそれらが使われるかどうかについて検討する。

① 過程（動作継続過程，変化継続過程）

過程については、次の3種類の動詞タイプが「しよる」「しとる」と組み合わせられることで表現される。

主体動作動詞

- (31) a. 友達を待ちよる。
- b. 友達を待っとる。

主体動作主体変化動詞

- (32) a. 出口から出よる。
- b. 出口から出とる。

主体動作客体変化動詞

- (33) a. シートベルトをはずしよる。
- b. シートベルトをはずしとる。

主体動作主体変化動詞，主体動作客体変化動詞は、「しとる」とともに用いられた場合は、結果状態も表すので曖昧である。

② 直前（動作開始直前，変化開始直前）

「直前」も3つの動詞タイプで「しよる」によって表現される。「しとる」では表現されない。

- (34) a. 飛行機が飛びよる。

主体動作動詞

- b. 出口から出よる。 主体動作主体変化動詞
- c. シートベルトをはずしよる。 主体動作客体変化動詞

③ 結果（主体の必然的結果，客体の必然的結果）

「結果」は状態を意味に含む動詞タイプに関して「しとる」と組み合わせて用いられるときに表される。

- (35) a. 出口から出とる。（出た後で、外にいる） 主体動作主体変化動詞
- b. 服を乾かしとる。 主体動作客体変化動詞
- c. わたし、あきらめとる。 心理動詞
- d. 山の頂上が見えとる。 可能動詞

主体動作主体変化動詞，主体動作客体変化動詞は，「しとる」は「過程」を表すこともあるので，曖昧である。

④ 痕跡（偶然的結果），経験記録（以前の動作の効力）

これらは，どの動詞タイプについても「しとる」とともに用いられるときに表現されるようだが，詳細については，さらに調査を必要とする。

⑤ 反復（反復習慣）

「反復」については，どの動詞タイプでも「しよる」「しとる」との組み合わせで表現されるようだが，これについてもさらに詳細に調査する必要がある。

4-7 まとめ

津山方言の「しよる」「しとる」の用法についてまとめると，大筋で工藤(1995)で報告されている用法と一致しているようである。しかし，細かい点では工藤(1995)で報告されていないものもあり，それは以下の点である。

- (36) a. 「過程」の用法については，主体動作動詞（非限界的）の場合，差が見られない。
- b. 主体動作主体変化動詞，主体動作客体変化動詞の「しとる」は，「過程」と「結果」の解釈が可能で曖昧である。

- c. 心理動詞では、主語が一人称の場合は「しよる」は容認されないが、三人称の場合は、「しよる」「しとる」ともに容認される。
- d. 可能動詞の場合は、基本的に「しよる」「しとる」ともに容認されるようである。「しよる」は瞬時的な現象を表す場合には容認されにくいと思われる。

1つ目の点については、工藤 (1995) での報告とは異なる内容である。それ以外の点は、特に明確に触れられていない。

5 考察

本稿は調査の中間報告であり、ここではこれまで調査を通じて判明したことを中心に、現段階での考察を行う。

標準語の「している」が「過程」と「(結果) 状態」を表すのに対して、西日本方言では、「しよる」が「過程」を、「しとる」が「結果」を表すと考えられ、また、近年では、主体動作を表す動詞については「しとる」も「過程」を表すとされている。今回調査した津山方言でも同様のことが観察される。

5-1 動詞の意味表示と「しよる」「しとる」

動詞の意味表示を考えると、動詞が表す事象が次のように「行為・活動」「移動・変化」「状態」のいずれか、あるいはこれらのまとまりであるということを前提とする。

(37) 動詞が表す事象 (これらのいずれか、あるいは、組み合わせ)

「行為・活動」+「移動・変化」+「状態」

これまで多くの研究で指摘されているように、「移動・変化」の事象から「状態」に移るときには1つの最高点 (culmination) または推移 (transition) があると指摘されている。また、ある活動・行為や移動・変化などが起こる直前にも推移に似た部分があると考えられる。このことを考慮すると、動詞が表す事象は次のように考えることができる。

(38) 動詞が表す事象（これらのいずれか、あるいは、組み合わせ）

（境界）「行為・活動」＋「移動・変化」（境界）「状態」

ここでは、「行為・活動」と「移動・変化」を「＋」でつないでいるが、この2つの事象は、順番で起こる場合だけでなく、完全に重複して起こったり、または、一部重複して起こることもあると考える。

このように動詞が表す事象を仮定すると、「しよる」と「しとる」の基本用法は次のように考えることができる。あわせて「している」の用法も示す。

(39) a. しよる：（境界）「行為・活動」＋「移動・変化」（境界）「状態」

b. しとる：（境界）「行為・活動」＋「移動・変化」（境界）「状態」

c. している：（境界）「行為・活動」＋「移動・変化」（境界）「状態」

さらに、「しよる」が「直前」を表すこと、「しとる」が「過程」を表すことを考えると、次のようになる。

(40) a. しよる：（境界）「行為・活動」＋「移動・変化」（境界）「状態」

b. しとる：（境界）「行為・活動」＋「移動・変化」（境界）「状態」

c. している：（境界）「行為・活動」＋「移動・変化」（境界）「状態」

例えば、「シートベルトをはずしよる。」は「直前」と「過程」の解釈が可能だが、「直前」の解釈は上記の図で「しよる」が境界に焦点を置いている場合、「過程」の解釈は「行為・活動」に焦点を置いている場合である。「シートベルトをはずしとる。」は「過程」と「結果」を表し曖昧であるが、「過程」は「しとる」が「行為・活動」に焦点を置いている場合で、「結果」は最後の「状態」に焦点を置いている場合と考えられる。

可能形の動詞についても、「しよる」は「行為・活動」に焦点を置いており、「しとる」は「状態」に焦点を置いていると考えることができる。しかし、この点については、可能形が表す事象をまず特定する必要がある。

「反復」については、動詞が表す事象が繰り返され、その連なりに焦点を置くと考えられる。例えば、「毎日お酒を飲みよる」は下のように「行為・活動」の繰り返し全体に焦点が置かれ、全体として行為や活動の繰り返しの解釈

となる。

(41) 「行為・活動」, 「行為・活動」, 「行為・活動」, …

「夏は、毎日服が乾いとる」「毎日、道の上に石が落ちとる」は乾いた状態や石が道路上にある状態が繰り返されているということで、次のように繰り返された事象の「状態」に焦点が置かれていると考えることができる。

(42) 「移動・変化」(境界)「状態」, 「移動・変化」(境界)「状態」, 「移動・変化」(境界)「状態」, …

痕跡(偶然的結果)と経験記録(以前の動作の効力)については、例えば、「もうお酒を飲んどる」では、お酒を飲んだ後、酔っているやお腹が満たされているなどその影響が今も残っていることを表しているが、これは、「飲む」が表す事象ではなく、話者が百科事典的な知識として意味を補うことによって表現されている。下の図では、「ある状態」を動詞が表す事象に付け足しており、この「ある状態」に「しとる」の焦点が置かれていると考えることができる。この表現はどの動詞タイプでも可能で、それぞれの動詞が表す事象に「ある状態」という事象が付け足されていることになる。

(43) 「行為・活動」+「ある状態」

以上のように、津山方言における「しよる」「しとる」のそれぞれの用法は、動詞の表す事象の一部に焦点が置かれると考えることで概略的に捉えることができる。

5-2 「直前」の用法について

「しよる」は「直前」の用法があり動詞によっては、「過程」の意味と曖昧な場合がある。

- | | |
|-------------------|------------|
| (44) a. 飛行機が飛びよる。 | 主体動作動詞 |
| b. 出口から出よる。 | 主体動作主体変化動詞 |

c. シートベルトをはずしよる。 主体動作客体変化動詞

「飛行機が飛びよる」は飛行中という「過程」の意味を表すとともに、これから飛び立つという「直前」の解釈も可能である。他の2つの例も同様であるが、「出口から出る」という場合、出口から外に出るという行為はある意味、瞬時的な場合も多い。この例でも「過程」と「直前」の間に曖昧性があると考えerことはできるが、実際にはその差がほとんど判別しにくい場合もある。同様に次の例を考えてみよう。

(45) 飛行機が離陸しよる。

ここでも、「過程」と「直前」の解釈が可能であるが、実は、「過程」の解釈そのものが非常に曖昧であることがわかる。実際には、離陸、つまり飛行機の車輪が地面から離れるのは一瞬である。しかし、離陸の過程を考える場合には、滑走が始まって車輪が地面から離れる場合を想定する場合も多い。この滑走から地面が離れるまでを「直前」と解釈することも可能である。このように、特に瞬時的な動詞の場合には、「過程」と「直前」の解釈が曖昧となる。本来的には、「過程」を表すのだが、その過程が瞬時的であるためにその直前の事象まで合わせて表すようになったと考えることもできる。

同じような説明が次の例にも当てはまる。

(46) 机から財布が落ちよる。

この場合、実際に財布が落ちるという過程は一瞬である。その一瞬を捉えて、「落ちよる」と表現することも可能であり、それは「過程」の表現となる。しかし、上の例は津山方言では、もう少しで落ちそうだという「直前」の解釈で用いられることの方が多い。当然、もう少しで落ちるところだったが落ちなかった、という過去の出来事も「財布が落ちよった」と表現する。このように考えると、下で図示するように、「直前」の解釈は、瞬時的な動詞の「行為・活動」に焦点を当てた「過程」用法から派生したと考えることができる。

(47) a. 過程：(境界) 「行為・活動」 + 「移動・変化」(境界)「状態」

- b. 直前：（境界）「行為・活動」 + 「移動・変化」（境界）「状態」

これに対して、標準語の「している」は「過程」の用法のみに留まっており、「直前」の用法は持たない。これは、「している」が「結果」用法を持つことと関係していると思われる。

5-3 「しよる」と「しとる」の過程解釈

津山方言では「しよる」と「しとる」の過程用法には差が見られないと上述した。しかし、次の例を見ると必ずしもそうではない可能性もある。動詞「行く」と「しとる」「しよる」の組み合わせが次のような事象を表すと仮定して考えてみる。

- (48) 行っとる

a. （境界）「行為・活動」 + 「移動・変化」（境界）「状態」

b. （境界）「行為・活動」 + 「移動・変化」（境界）「状態」

- (49) 行きよる

（境界）「行為・活動」 + 「移動・変化」（境界）「状態」

(50) では、空港にいる父親からの電話で、まだ哲夫が空港に着いていないとわかっているため、移動の途中であるということをはっきりと表現するために「行きよる」が用いられる。「行っとる」は既に到着しているという「結果」用法もあるため、誤解されるのを避けるために用いられない。(51) では、家を出ていることが重要で、空港に着いているかどうかは問題ではないので、「行っとる」「行きよる」のどちらも用いられる。ここでは、既に家にはいないということを表現するために「行っとる」のほうを用いることが多い。

- (50) 空港にいる父親が息子が空港に迎えに来るのを待っていて、家にいる娘とする会話（父親は空港。娘は家。）

父「哲夫はどこに行った？」

娘「空港に行きよるよ／ ??行っとるよ。」

- (51) 父親が家で息子を探して見つからず、娘とする会話（父親も娘も家。）

父「哲夫はどこに行った？」

娘「空港に行っとるよ／行きよるよ。」

この議論では、「行く」が「行為・活動」と「移動・変化」の他に「状態」も表すという前提で考えたが、「行く」の意味についても検討をする必要はあるだろう。

「しとる」は、後ろの境界を挟んで、その前後の事象に焦点を置くことができる。それに対して「しよる」は前の境界とその後の事象に焦点を置くということで、「しよる」「しとる」は用法において重なることがあるとはいえ、役割分担がなされている。標準語の「している」はこの点では「しとる」に似ていて、後ろの境界の前後の事象に焦点を置く。最初の境界に焦点を置けば、表す意味が多様になりすぎ解釈が難しくなる。そのため、最初の境界には焦点を置かず、「直前」の意味を表すことができないのだと考えることができる。

6 結語

本稿では、津山方言の「しよる」「しとる」の調査の中間的な報告を行った。これまでの調査では、この2つは一般的な西日本方言に見られる用法とほぼ同じように用いられるが、主体動作主体変化動詞、主体動作客体変化動詞の「過程」と「結果」の用法は曖昧であることが観察された。また、これらの観察をもとに、「しよる」「しとる」とそれぞれの動詞タイプの意味表示の関係を考察するとともに、「しよる」には「直前」用法があるのに対して「している」には無いことの理由について考察した。

心理動詞や可能形の動詞、また、各動詞タイプと「痕跡（偶然的結果）」用法、「経験記録（以前の動作の効力）」用法の関係については、さらに調査を深める必要がある。また、本稿では、「しよる」「しとる」の意味表示については、動詞の事象構造と関係させることで概略的な分析に留まった。これを何らかの理論に依拠して、より形式的に整えていくことが必要である。

主要参考文献

磯野達也 (2016) 「動詞のアスペクトと瞬時性について ―スケール構造を導入した語彙の意味表示の一考察―」『社会イノベーション研究』11.2: 135-148 成城大学社会イノベーション学会

- 工藤真由美 (1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト ―現代日本語の時間の表現―』ひつじ書房.
- 工藤真由美 (2002)「現象と本質 ―方言の文法と標準語の文法―」『日本語文法』2.2: 46-61
日本語文法学会
- 工藤真由美 (2004)『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系 ―標準語研究を越えて―』ひつじ書房.
- 工藤真由美 (2006)「日本語のさまざまなアスペクト体系が提起するもの」『日本語文法』6.2: 3-19
日本語文法学会
- 島本智美 (2007)「熊本方言教材開発のための「ヨル」と「トル」の一考察 ―若者の使用実態を中心に―」
- 日本語記述文法研究会 (2007)『現代日本語文法 3』くろしお出版
- 畠山真一 (2013)「熊本方言におけるシヨル形の用法」『尚綱語文』(2): 16-22
尚綱大学文化言語学部・日本文学懇話会
- 宮島達夫 (1972)『動詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版